

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第649号 平成25年11月26日

ニートだけの会社？

「ニートだけの会社」、その名も「NEET株式会社」を立ち上げる、そんな企画が進行中というニュースを目にしたのは、今年の8月の事でした（8月14日付朝日新聞）。

その後どうなっているのか気になっていましたが、10月30日、会社定款の委任状に立ち上げメンバーが押印し、11月21日に登記して正式の会社として発足という運びとなりました。

会社は全員取締役で、当初の参加者は170を超えており、今後更に増える見込みといます。

プロジェクトへの参加者が「ニート」である事はともかくとして、全員が取締役というのは驚きで、この取り組みが成功すれば画期的といえるでしょう。

参加者の中には、馴染めなかった社会で一步を踏み出そうとする人もいるという事ですから、このプロジェクトから新しい働き方が生まれる可能性はあると思います。

ただ、全員が「ニート」で取締役という会社が、果たして旨く機能するのか、余計なお世話ですが心配になります。

「ニート」というのは、「Not in Education, Employment or Training」の頭文字をとった造語で、就学、就労、職業訓練のいずれも行っていない状態の人を指しており、そうした「ニート人口」は、60万人を超えていると見られています。

人々が「ニート」となる原因については、健康上の理由、就職活動の失敗、人間関係など様々なものが考えられますが、「ニート」を取り巻く環境には、働かなくても親がかりで生活していけるという現実が一方にはあると思います。

「ニート」というのは、働く意欲のない人達という印象が強いのですが、積極的に社会に出ようとしている「ニート」の存在に、「ニート」に対する見方を変える必要があるとも、感じています。

東京大学の本田由紀教授（教育社会学）は、『「ニート」って言うな！』という著書の中で、

「ニート」と一口にいうけれど、その中には様々なタイプが有って、「働きたいニート」と「働きたくないニート」はほぼ半々で、しかも、「特に何もしていない」人

達は「ニート」とされる人達の3分の1程度に過ぎないとしています。

また、本田教授は、「ニート」と一括りに呼ばれている人達の内実を詳しく見て見ると、単に「今働いていない」という事が共通するだけで、極めて多様な状態の人が混在している（同氏著『「ニート」って言うな！』から）、と述べています。これはいい換えれば、「ニート」と呼ばれている人達の中にも、何かのきっかけがあれば行動を起こし得る人が少なくない事を示しており、今回の「ニートだけの会社」立ち上げのニュースは、改めてその事を再認識させてくれました。

この企画を中心になって進めて来たNPO「ヒトコトネット」の安田佳生理事長は、「コンサルティング会社を経営していたとき、『組織に属するのは嫌』と話す多くの若者に出会い、ニートだけで会社を作ったらどうなるだろう」と考えていたといいます（8月14日付朝日新聞）。

私は、「ニート」達が、自らそうした状況から抜け出そうと一歩踏み出した事は評価すべきと思っており、是非成功して欲しいと願っていますが、ただ同時に、企業経営というものを考えた時、組織抜きに事業展開する事は難しいのではないかと懸念しています。

全員が取締役というのは平等で良さそうですが、そうした組織では、意思決定に時間がかかりそうですし、何より、責任の所在が不明確になりがちです。

170人全員が取締役というのは、常識から外れた大胆な取り組みである事は確かです。しかし、リーダーのいない組織はないと思いますし、存在するとすれば、それは単なる仲良しクラブでしょう。いや、仲良しクラブにだって、リーダー的な存在はいる筈です。結局、見かけ上はフラットな組織でありながら、現実には強力なリーダーが出現し、多くの人達はそのリーダーに従うという構図も想像に難くありません。それは恐らく、「ニート」と呼ばれる人達がかつて経験し、忌避してきた世界に戻るという事ではないでしょうか。そうした時に、「ニート」達が自分自身を変えられるかどうか問われるでしょうし、同時に「ニートだけの会社」が成功するか否かのカギもそこにあると考えています。（塾頭：吉田 洋一）